



薬学部長就任のご挨拶

平成二十五年四月一日付

薬学部分子生物薬学講座 教授 前田正知

主陵会の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

この度、二井将光先生の後任として、薬学部長を拝命いたしました。故大堀勉理事長先生、そして二井先生の「日本一の薬学部を作りましょう」という旗振りの下、完成年度まで順調に進んで参りました薬学部ですが、さらなる学部の発展に向けて舵取りを行うことの重責を深く心に刻み、着実にまた全力で職務を全うしたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年度は、一期生の卒業と薬剤師国家試験受験と言う大きな目標に向けて、薬学部教員は一致協力して学生の指導に力を注いで来ましたが、盛岡八幡宮にも教員が揃って詣で、ご祈禱をしてもらいました。その甲斐あってか、三桁、九〇・三%の国家試験合格者数・合格率となりました。主陵会からも学生に対する様々なご支援をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。また、キャリア支援センターの設立により学生に対する就職支援も手厚くなされ、就職内定率はほぼ100%でした。就職者の内訳は、病院四二%、調剤薬局四〇%で、全国の薬学部の平均とは逆の比率でした。医療系総合大学としての本学の特徴となるのかもしれませんが、

これから毎年、薬学部から主陵会正会員が

続々と誕生いたします。どうぞ、これまで以上に暖かいご指導を賜りますことをお願いいたしますと同時に、主陵会が益々発展されますことを祈念いたします。

さて、薬学部は完成年度を過ぎ、様々な活動を主体的に行うことができる状況になりました。そこで、今年度から実施したのは新カリキュラムの導入です。学生が早くから専門の内容を学び、自分の将来を確認できるよう、一年次にこれまで以上に薬学の導入科目を提供することとしました。これにより、薬学部の多くの教員が新入生に対する講義を担当することにもなり、入学者の学力を客観的に把握できると考えています。また、教員が多様な学力の学生に対する教育方法を工夫し、それを共有することを期待しています。このような前倒しは、学生の側でも専門科目を早めに修得し終えることになるため、より実践的な新規科目を学んだり、CBTや国試対策の準備にあてる時間を確保できることになり、プラスとなるはずですが、

薬学部が完成年度を迎えたことで変わったことがもう一つあります。それは、大学院薬学研究科が四月から新たに設置されたことです。研究科は六年制薬学部を卒業した学生が主として入学する博士課程と、四年制の学部を卒業した学生が入学する修士課程の二つから成ります。

これで、医・歯・薬三学部に通じた体制が整い、連携した教育・研究のメニューを提供できる基盤ができました。大学院は、社会人にも開放されていますので、是非主陵会員とのお知り合いに周知していただければと思います。

他に薬学関係の動きでは、全国の薬科大学・薬学部で平成二十七年より改訂コアカリが実施されることになっており、薬学会を中心とする改訂作業が最終調整に入っています。また、薬学評価機構による薬学教育評価が本年度から始まり、平成三十一年度までかけて一巡します。改訂コアカリ、評価ともに、六年制薬学部の目標が「臨床に資する薬剤師の養成」ですので、当然、医療現場やそれと関連する事項への取組みが重要視されます。矢巾地区への病院移転のロードマップも動き出しており、薬学部にとつては大変心強い限りです。薬学部がさらなる飛躍をするためにも医学部・歯学部の諸先生、主陵会員の皆様との連携は不可欠と考えています。最後にありますが、本学の建学の精神に則り、地域医療と先進医療に寄与できる卒業生を輩出するため、学部が一丸となり教育・研究を推進して行きたいと思っておりますので、主陵会の皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

平成二十五年四月一日付



薬学部臨床薬理学講座

教授 工藤 賢三

主陵会の諸先生方におかれましては、ますますご健勝のことと心よりお慶び申し上げます。

さて、この度私は平成二十五年四月一日付けをもちまして、高橋勝雄名誉教授の後任として薬学部臨床薬理学講座の教授を拝命いたしました。また、併せて附属病院薬剤部長にも任命いただきました。大変光栄なことであると、その責任の重さに身の引きまじる思いであります。もとより微力ではございますが、歴史と伝統のある岩手医科大学の更なる発展のため誠心誠意、尽力いたす所存でございますので、主陵会会員の皆様のご指導ご鞭撻を賜りたく、何卒宜しくお願いいたします。

私は、昭和五十八年に東北薬科大学を卒業し、本学附属病院薬剤部に薬剤師として就職いたしました。薬剤部では薬剤業務を行う傍ら、薬物血中濃度モニタリングによる投与設計ならびに測定法の検討、中毒原因薬物の同定と血中濃度に関する検討、医薬品の適正使用に関連した疫学調査など、実務に関するテーマで研究を行ってきました。また、昭和六十三年七月より本学歯学部内科学科の専攻生となり薬用人参の研究を始めました。平成七年四月より本学医学部薬理学講座の

助手に任用替えとなり、引き続き薬用人参の薬理作用の研究を行ない、神経モデルとしてウシ副腎髄質細胞を用いて薬用人参サポニン成分の作用特性を報告しました。また、腸内細菌で代謝された薬用人参サポニンがニコチン性アセチルコリン受容体機能を強く抑制することを明らかにしました。並行して神経系に対するステロイドホルモン(ニューロステロイド)作用の研究に着手し、プレグネノロン硫酸、デヒドロエピアンドロステロンおよびその硫酸体についてニコチン受容体刺激応答に対する作用を検討しました。また、神経型ニコチン受容体を発現させるその阻害効果を検討し、ステロイドがニコチン受容体機能に *not-genomic* に影響

することと神経の興奮性を調節している可能性を示しました。この研究により、平成十五年五月に本学より博士(医学)の学位をいただきました。また、この間留学の機会をいただき、平成十一年五月より十二年の六月まで、米国コロラド州立大学の Anthony Tu 教授の研究室で Research Associate としてヘビ毒の研究を行うことができました。

また薬学部臨床薬理学講座准教授となり、教育とともに実務に関連した幅広い研究を行ってきました。従来より医療従事者における抗がん剤環境被曝が問題となっており、医療環境中や抗がん剤調製用安全キャビネット内に付着した抗がん剤の分解を目指し、光触媒(二酸化チタン)を応用したところ、環境空気中や安全キャビネット内の抗がん剤に対して高い分解活性を持つことが明らかとなりました。また、がん性疼痛に用いられるフェンタニルマトリックス型パッチ製剤からの主薬皮膚移行性が患者の体脂肪等の栄養指標に相関することを報告し、さらに栄養状態を簡便に評価可能である栄養スクリーニングツールを用い、栄養状態とフェンタニル皮膚移行率との関連性を検討したところ、栄養状態低下とフェンタニルの皮膚移行率が相関し、栄養状態低下時にはより注意深い疼痛モニタリングが必要であることを報告しました。現在、厚生労働科学研究費(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)「医療用医薬品の使用上の注意の在り方に関する研究」の分担研究者として医療用医薬品添付文書の記載要領提言に向けた調査研究も進行中であります。

現在の医療では、患者が安心できる安全で質の高い医療が求められております。また、医療技術の進展とともに薬物療法も高度化、複雑化してきており、薬の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加することが強く期待されております。さらに、医療の質の向上及び医療安全確保の観点から多職種が協働して行うチーム医療が推進されるとともに、病棟での薬剤師の常駐が必要とされ、地域では軽

医療や在宅医療への積極的な関与が求められるなど、医療における薬剤師の役割は大きく変化してきております。薬学は、医薬品の創製、生産、適正な使用を目標とする総合科学であり、薬剤師の育成を通じて医療を担うという大きな使命があります。このような社会の要請および医療現場でのニーズを踏まえ、質の高い医療を担うことのできる、建学の精神「誠の人間の育成」に基づき豊かな人間性を持った薬剤師の育成に取り組んで参りたいと思っております。

良い教育のためには良い教育環境が必要であります。本学附属病院及び薬剤部が主たる実務実習の場であり、学部及び大学院における臨床教育の実践の場となることを考慮し、これまで以上に薬剤業務の質を高めることにも努め、さらなる教育的責任を果たしていきたいと思っております。特に、医療の高度化に対応するチーム医療に関わる専門性を有する薬剤師の幅広い養成を目指し、チーム医療の実践と専門教育体制の整備をさらに進めたいと考えております。薬学部と附属病院の連携した実務実践教育が本学の特徴となるため、高い教育効果がもたらされるような体制構築を目指していきたいと考えております。

これまでの薬剤師実務ならびに研究・教育の経験を薬学教育に活かし、リサーチマインドを持った臨床に資する薬剤師の育成に最善をつくしたいと考えております。教育と研究、実務に微力ながら最大限の努力を続けていく所存でございますので、主陵会の先生方にはご指導とご高配を賜りますようお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

平成二十五年四月一日付



教授 江 尻 正 一

共通教育センター情報科学科数学分野

主陵会の皆様方におかれましては、益々ご健勝でご活躍のことと心よりお喜び申し上げます。

さて、この度私は平成二十五年四月一日付けで岩手医科大学共通教育センター情報科学科数学分野教授を拝命致しました。岩手医科大学での教育、研究そして校務活動に関するこれからの責務の重さに身の引き締まる思いが致します。

私は福岡県北九州市で生まれ、小学校入学前年に父親が故郷で会社設立するため富山県高岡市に移住しました。小学生のときは、よく時計を見る度、秒針を見つめれば見つめるほど、なぜ時間がゆっくり進むのか、なぜ起床から通学までの時間が短いのかなど不思議に思っていた少年でした。このように両親の苦労も知らずに受験勉強はあまりせず、専ら好きな自然科学の啓蒙書・雑誌を読んだり、星空を眺めたりしてのんびりと暮らしていました。このような多感な時期に多くの事柄が私に、自然に対する考え、捉え方に多大な影響を与え、自然界に存在する万

物の裏に潜む原理や法則に対して畏敬の念を感じながらも、触れてみたいという強い思いが培われ、いままもなく研究活動の動機の一つになっていきます。

地元の高校を卒業し、時間、空間をも扱う学問である理論物理学、特に相対性理論を学びたく岡山理科大学理学部応用物理学科に入学しました。当時、大学には相対論的效果を観測された小貫章先生や湯川秀樹研究室出身の二中間子論の谷川安孝先生を始め著名な先生方が教壇に立たれ、また良き学生、先輩に恵まれ、仲間と専門書を輪読したり、議論を交わしたりして大いに刺激を受けた学生生活を過ごしました。ゼミでは大阪市立大学へ内地留学後の中力眞一講師(当時)を師事して相対論に基づくスピン係数法による重力構造を学びました。大学卒業後は富山大学大学院理学研究科において量子物理学講座の松本賢一教授、平山実助教、濱本伸治助手(当時)のもとで早期宇宙論やダークマターについて基礎的研究を行い、理学修士の学位を取得いたしました。その後は三重県で四年間、宇

治山田高等学校(伊勢)、三重高等学校(松阪)で常勤教員となり、オーストラリアの大学で一年ほど過ごしました。

帰国後は金沢大学大学院自然科学研究科で廣瀬幸雄教授、佐々木敏彦助教(当時)のもと、宇宙の幾何学から

材料の幾何学へと対象を変えて研究を行いました。この研究を行う際、多大な影響を与えた学問的出会いが三つありました。それは固体内部に存在する微細欠陥構造に対する幾何学であるマイトロメカニクス、金属材料の結晶粒方位の偏りを対象とする集合組織理論、そして結晶性材料にX線照射し、その回折線により材料表面下の応力状態を逆解析して求めるX線応力測定法でした。材料科学の分野で、これほどテンソル解析、微分幾何学、ポテンシャル論や関数論などの高度な数学が駆使されて実用化を図られていることに驚き、大いに刺激を受けました。また、

両先生にはその研究姿勢から研究活動の在り方をも教えて頂き、苦しい時期もありましたが、叱咤激励を受けて学位を取得いたしました。

博士課程を修了した年、長野市内の清泉女学院短期大学および清泉女学院大学に任用して頂きました。当時、清泉女学院大学は、教員達が議論して建学の精神のもと実現目標として「自分を高め、他者のために考え、行動できる人間の育成」を定め、教育を行っていました。私はこれに共鳴し教育を行い、今も私の教育姿勢に影響を与え続けています。校務としては多くの委員

長を歴任し、当面の役割も含め、迅速な学生対応、教育環境向上のために組織機能の逐次改善に心配りました。学部内のコース長として昨年度まで学部のカリキュラム改善・魅せ方等々、皆と苦心いたしました。

現在、研究面では、X線応力測定法を構成する測定理論の開発を中心に行っています。これまで発表した研究は、金属材料を対象とし、被測定物の弾性異方性を結晶方位分布関数(ODF)として捉え、テンソル解析を用いたX線応力測定法の開発、三次元CGを用いた集合組織理論の教材開発、イメージングプレートなどに代表される二次元X線検出器による応力測定理論の開発などがあります。

ここ数年、タブレット、SNS、クラウドコンピューティング等の出現によつてユビキタスネットワークが進み、私たちの社会形態や意識・無意識等に対して変更が迫られてきています。それに対して現在の情報教育のみならず、コミュニケーションツールを皆で活用するためにプロジェクト管理のセンスを養う教育が必要と考えています。将来的にそのように取り組みたく考えております。また、数学教育に関しましては、より実践的に扱えるように基本とともに俯瞰する力を可能な限り教えたく考えております。

本学および社会のさらなる発展のため、貢献したく努力を重ねていく所存です。皆様にはご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。